

# 太平洋炭砒「ヤマ」の氏神さんとその行方

佐藤 富喜雄\*

## 1. 春採神社の変遷

春採神社の御神体は、2002(平成14)年1月の太平洋炭砒の閉山により同年7月19日に会社、敬神会、社員とその家族の代表者に見守られながら愛媛県大三島の本社、大山祇(おおやまづみ)神社に返還されました。ヤマ(炭砒)の安全祈願と社員家族の信仰の拠り所であった春採神社も、その役目を終えたのです。初代の安田時代から太平洋炭砒時代まで、明治、大正、昭和、そして平成と実に112年間の長きに亘りヤマの安全と社員・家族の安寧を祈願していただきました。

さて、初代の春採神社は1890(明治23)年、伊予国(愛媛県)の三島大明神から大山祇大神の御神体を春採炭砒発祥の地、元町(現在の春採5丁目)に設置されたものとされています。当時の社殿は九尺四方(2~3坪)程度の小さいものであったと記録されています。また、この神社は安田炭砒から木村組炭砒に変わってからも引き継がれ、1927(昭和2)年まで、ヤマの守護神として祀られました。

2代目は、1927(昭和2)年、現在は太平洋記念みなみ病院のある高台(春採7丁目)に新築遷座されました。当時は参道の隣接地に「湖畔小学校」がありました(現在もその「奉安殿」が旧参道の脇にあります)。遷座にあたっては、社員1人当たり20銭の抛金(当時坑内員の日給は1円30銭)と会社の補助で建てられ、また本殿の上棟式には、モチまき、各家庭には紅白のモチが配られました。この神社は、1960(昭和35)年まで鎮座していました。

3代目は鎮座地こそ変わりませんが、社殿の老朽化と拡充の必要から1960(昭和35)年7月、コンクリートブロック造り、内部はフローリング椅子席、車輛乗り入れの道路取付け、鳥居も鉄筋コンクリー造りに更新されました。神前結婚式や七五三も挙行できる近代的神社に衣替えしました。

4代目は、1981(昭和56)年11月26日の深夜、その下町(春採7丁目)から釧路市内の高台、青雲台に遷

宮されました。このころ、太平洋炭砒の採掘現場が太平洋の海底下に展開し、社員住宅も上町(桜ヶ岡)地域に集約移転されており、春採坑坑口と上町・下町を眺望できる高台への遷宮が要望されていました。青雲台には、すでに炭砒労使による社員自ら運営する太平洋炭砒福祉組合によるプール、ボウリング場、体育館などの総合レジャーセンターが建設されていました。ここに春採神社が遷宮され、ヤマの氏神の祭は大変な賑わいを見せました。



解体前の春採神社と稲荷大神(右奥) [青雲台]

## 2. 山神祭の賑わい

山神祭は当初、慰安・娯楽としての要素が大きく、大層賑やかだったようです。安田春鳥炭山時代、祭りの日には会社から各家庭に8寸から5寸(約24~15cm)くらいの紅白のモチが配られ、酒も飲み放題だったといえます(「北東日報」1901[明治34]年10月5日記事)。また、能登神楽の花相撲が賑やかに行われ、夜は神殿から長屋まで手づくりの行燈で飾り、坑内火薬を使って花火を打ち上げたり、さらに釧路市内から多くの有志や顧客を招いて芸妓も総揚げする豪勢さで、米町=沼尻間は花や提灯で飾った「軌道馬車」が往来、春採湖畔には飾り付けられた屋形船が客を送り迎えしたそうです(小野田弘「私たちの住むヤマの昔」(38):社内報「太平洋」211号/1961年7月28日)。

神輿は元町(安田炭砒)時代にはありませんでしたが、宮下町時代(下町・2代目)になり炭砒の木工場の

\* 太平洋炭砒元社員・太平洋炭砒管理職釧路倶楽部顧問

大工さんが、また金具の部分も同じく修理工場の職工さんが作り共同奉納してから「神輿行列」が出るようになりました。戦前の神輿行列は大変賑やかで、白丁（神輿を担ぐ人・行列）の数が多かったのが特徴だったそうです（「座談会 山神祭 むかし-いま-これから」：「太平洋」253号／1963年7月12日ほか）。

戦後間もなくから春採神社社務所の管理人を務めた木村泰治さんは、社内報「太平洋」1981（昭和56）年正月号でこう振り返っています。

『正月が近づくと、社殿のすす払い、しめ縄づくりに掛かるのは例年のことだが、これまた大変な仕事、最初の頃は慣れない手つきで、反対にあんでは何度もやり直しがかかったものだ。神社参拝者も、世相の景気を反映するとされ、参拝者の数により毎年の景気を占ったりしたものだった。』



賑わうヤマ祭（神輿渡御）

太平洋炭砒には、春採神社を崇敬し、相互の信仰を高め、業務の安全と家内安泰を祈願する組織「敬神会」がありました。ほとんどの社員が加入し、氏子として月例祭、山神祭、正月祭を施行しました。

敬神会の会員だった佐々木幸次郎さん（掘進）は、その活動と山神祭の賑わいについて、社内報「太平洋」1989（昭和64）年正月号にこのような記事を寄せています。

『戦後まもない頃は、進駐軍の命令で敬神会の活動は禁止されてしましてネ、それで秋田県出身者で結成していた「雄勝会」が神社のお世話をしていました。私も秋田県出身でしたので、昭和二十五年から一緒に奉仕活動に加わり、以来三十九年間春採神社とお付き合いすることになりました。

敬神会の行事は、初詣に始まり、毎月の安全祈願

祭、節分、山神祭、七五三がありますが、どれ一つとってもいろいろな思い出があります。

除夜の鐘を自宅で聞くことはまずなかったなー。今では、神社にも蒸気暖房がありますが、当時は火の気は全くなかったのが本当に大変でした。でも、参拝者から“おめでとう”と声をかけられると、そんな苦勞は吹き飛んでいきましたネ…。

昔は娯楽が少なかったので山神祭も大変な賑わいでした。御神輿が練り歩く沿道には鈴なりの人がつめかけ担ぎ手に威勢よく声をかけていたものです。傑作だったのは、休憩の度にお神酒の接待で飲み過ぎて、神社に戻る頃にはよって御神輿にぶるさがる担ぎ手がいました。』

### 3. お宮はどこへ

さて、御神体返還後のお宮は一体どうなったのでしょうか。社殿内部の装飾品は、青雲台の「炭鉱展示館」にその一部が展示してあります。春採神社の名盤や歴代敬神会や祭事の記念写真はあるものの、肝心の御神体を祀った「お宮」の行方が判りません。筆者も1981（昭和56）年の青雲台への遷宮に関わった氏子の1人として探索を開始しました。

幸い厳島神社と共に春採神社の祭事を司っていただいた共栄稲荷神社（釧路市共栄大通）の氏子で、博物館友の会前会長の中塚美恵子さんの協力を得ることができました。

中塚さんから共栄稲荷神社の鈴木宮司さんに確認いただき、釧路町の「天寧（てんねる）神社」に移転されたことがわかりました。そして2013（平成25）年7月、中塚さんとともに天寧神社を訪れました。お宮の場所はすぐわかりましたが、神殿は施錠され入ることができません。だれが管理しているのだろうか？と付近をウロウロしていたら、散歩していたご老人がいました。なんとこの方は、釧路馬産の功労者、神 八三郎さん



春採神社から遷宮したことを示す銘板



の御子息でした。そして「俺よりも弟が詳しい」と青木五朔さん(天寧町内会会長)を紹介くださいました。

青木さんのご案内であらためて天寧神社を訪れました。社殿内には春採神社のお宮と遷座の経過の銘板がありました。ようやく探し当てた瞬間でした。おもわず同行の中塚さんと顔を見合わせました。お互い良かったね、との思いでした。青木さんのお話では、社殿の建っている場所は、かつて(太平洋炭砒ではない別の)炭鉱のあった場所とのこと、なにかしら運命的な思いにかられました。



炭砒跡地に鎮座する天寧神社

天寧神社は、1900(明治34)年4月、阿寒一步園の前田製紙合名会社により建立され、その後、富士製紙(株)が引き継ぎ、幾多の変遷を経て現在の場所になりました。この間一時期、神牧場が維持管理にあたっていたと伺いました。

次に、春採神社と同じく祀られていた「瀧駒(たきこま)稲荷大神」の探索を行いました。これには中塚美恵子さんが当たってくれました。共栄稲荷神社の「ご鎮座90周年誌」(2003[平成15]年発行)には、「同年6月に旧春採神社の境内に奉祀する伏見正一瀧駒稲



瀧駒稲荷大神

(左：旧春採神社／右：現共栄稲荷神社)

荷大神(太平洋炭砒閉山のため、閉山後3ヶ年ほど奉斎されずにいた)を境内社として合祀する」とあります。中塚さんと共栄稲荷神社を訪問したところ、本殿入口に立派に祀られていました。早速参拝させていただきました。

#### 4. 「奉鎮祭」杭の発見

2代目春採神社の「奉鎮祭(上棟祭)」杭が2012(平成24)年、太平洋炭砒の協力会社だった柴又運輸工業が廃業する際に倉庫で発見され、その後、釧路市立博物館に収蔵されました。

棟札では上棟祭の時期が1927(昭和2)年6月7日と裏付けされ、また、御霊、祭主、施工関係者の名前など当時を偲ぶ記録も刻印されています。

太平洋炭砒の閉山で行方をさがしていた春採神社と稲荷大神、どちらも安住の地を確認できました。文末ですが、ご案内いただいた青木五朔さん、ご同行いただいた中塚美恵子さんに御礼申し上げます。

#### お知らせ

#### 80周年記念・「釧路フォント」の博物館ロゴ完成

2016(平成28)年7月14日に開館80周年を迎える当館では、記念企画展の開催をはじめ各種の取り組みを進めています。その一環として、釧路市出身のデザイナー(創形美術学校(東京)在学中)の奥田実咲さんが考案した「釧路フォント」での博物館ロゴ制作を依頼、昨年11月3日(新館開館記念日)より使用開始

## 釧路市立博物館

しました。ロゴ(上)は、釧路の夕日、水の雫、タンチョウそして釧路のレトロな街並みを、また「立」は博物館の建物で、そこから夕日が見えるというイメージで制作されています。

今後、各種印刷物をはじめ博物館のイメージアップに大活躍する予定です。(石川孝織)